

## 当別町で障害児者支援に取り組む大原さん

# 若者を福祉の現場へ

石狩管内当別町を拠点に障害児者の支援活動などに取り組む社会福祉士の大原裕介さん(30)は昨秋、道内の福祉現場で働く若手職員のネットワーク組織を仲間と設立したのに続き、今月から、道から受託した若者対象の福祉人材育成事業の統括プロデューサーにもなった。なぜ「若者」か。思いを聞いた。

(中原洋之輔)

「残された高齢者はどうなるのか」。大原さんは昨夏、総選挙のテレビ番組に憤りを覚えた。高齢者施設で働く若い職員が「給与が低く、辞めるかも」と漏らしたからだ。

ただ、待遇を改善しなければ、若者が福祉に背を向けてしまうとも考えた。「これを機に、同世代の若者の支援を本格的に考え始めた」と振り返る。実際、若者の「福祉離



「若者が福祉に背を向けたら、現場は崩壊してしまう」と話す大原さん

### ネットワーク組織設立、交流や情報交換

## 仲間で支え合い 起業支援も

れは顕著だ。

道厚生局などによると、道内の大学などの介護福祉士養成課程入学者は2005年度の1518人(定員充足率91%)から、09年度は878人(同58%)に急減。一方で、高齢化は急速に進んでいる。福祉人材が不足するのは明らかだ。

大原さんが昨秋立ち上げたネットワークは、若手職員の交流や情報交換を図り、仲間同士で支え合う態勢をつくる。若い人材を離職させず、福祉の専門家としての力量アップを目指す。一方、道の委託事業を行う「福祉・介護人材サポートネットワークセンター」は、高校生への出前講座で福祉の魅力を伝えるほか、福祉分野の起業も支援する。

さらに、全国の若手福

社職員対象の意識調査を実施するなど、各地で活躍する仲間との連携も深めている。

大原さんは「起業支援で小規模な事業所ができれば、道内の福祉サービス空白地帯を埋める手段となるはず。道内外の若手職員との連携で、現場で孤立せず互いに支え合うこともできる」と話す。

大原さん自身、道医療大卒業後の05年にNPO法人「ゆうゆう24」を同町に設立、障害児の預かりサービスを始めた。現在、同町のほか江別と夕張で計7カ所の事業所を運営、障害児者と高齢者向けの福祉サービスを提供している。

実は福祉に関心の薄い若者だった。しかし、大学3年の実習で大きく変わった。

札幌市内の福祉施設で一組の母子に出会った。10歳の自閉症の少年は学校に行かず、施設にこもり切り。母親もそばを離れない。ところが実習終

了直前、声をかけられた。「『外出したいから息子を見て』と。ぼくを信じて息子さんを預けてくれた」。2人でキャッチボールをした。目も合わせなかった少年がケラケラ笑った。障害児が心を開いてくれた瞬間だった。

大原さんは当時の感動を振り返り「福祉の仕事は本当に楽しい。ただ、それだけではなく、社会的に大きな意義もある。このことを同世代に発信したい」。この積み重ねが、福祉現場を守る一歩になると確信している。